



第三章 柏日体高等学校の沿革（第二部：第三編 学校法人日本体育会経営高等学校の沿革）

著者	日本体育会百年史編纂委員会
雑誌名	学校法人日本体育会百年史
ページ	1210-1230
発行年	1991-10-28
URL	http://id.nii.ac.jp/1444/00001093/

第三章 柏日体高等学校の沿革

(一) 開校の経緯

千葉県柏市は、昭和二十九年に市制が施行されたが、その当時は人口が四万人余りで市内の至る所にのどかな田園風景が広がっていた。しかし、首都近郊の恵まれた立地条件にある同市は、その後商業や工業の面で飛躍的な発展をとげ、徐々に首都圏に組み入れられ、今日では人口三十万余の都市にふくれあがっている。

現在、柏市の県立・市立高校は八校を数え私立高校も四校となったが、柏日体高等学校が創立された昭和三十五年当時は、私立高校一校のみで、市内にある五中学の進学希望者を全て受け入れることは不可能な状態にあった。加えて同市は、首都圏のベッドタウンとして急激な人口の増加が見込まれ、これに伴う教育施設の整備・拡充は焦眉の急務となっていた。特に、高校の新設・誘致は、柏市民あげての要望でもあった。

折しも、当時の日本体育会米本卯吉理事長は、他の事業の関連で、この柏市近郊の手賀沼周辺に度々足を運んでいた。東京都競馬株式会社の会長でもあった米本氏は、この手賀沼周辺に首都圏の一大レジャーランドを建設する構想を持っており、そのため全日本観光という会社を創立して当地周辺の土地の買収を進めていたのである。昭和三十四年の春、米本理事長がこの目的で当地を訪れた折、「うちの学校は運動場が狭くて困っている。この辺によい土地はないか。」と述べられたことがきっかけとなり、地元柏市から高校誘致の話が理事長に持ちかけられたのである。その折、米本理事長は、「うちの学校を一度見てみてはどうか」と提案され、市議会議員をはじめその関係者

が、日本体育大学及び日体荏原高等学校を視察することになった。視察の結果、同市議会では、昭和三十四年六月十九日、「日本体育大学及び付属高等学校誘致促進に関する決議」案を全会一致をもって可決し、さらには、昭和三十四年八月二十二日、浜島千代丸柏市長より、前記決議に基づき、「日本体育大学付属高等学校設置」が正式に学校法人日本体育会に要請されたのである。その要請には、当時の柏市が財政的にかなり逼迫した状態にあったため、土地・建物一切の費用は日本体育会が負担するという条件も含まれていた。

その要請を受入れ、日本体育会は、さっそく用地の買収等の準備に入った。おもに、用地の買収にあたったのは、日本体育会本部の西村事務長と、柏日体高等学校初代校長井上弘夫の両氏であった。井上氏は当時、米本理事長経営の東京都競馬株式会社の企画部に籍を置きながら、同社不動産部の業務も兼任し、手賀沼周辺に一大レジヤランドを建設するため、毎日のように、沼南、柏、我孫子地区に出向いて、土地の買収やそれに伴う現地及び県当局との折衝の仕事に従事していた。まず、第一の候補地として鴻の巣の開拓農地が、次いで南柏の用地の奥、根戸の台地、現在の豊四季団地の一角等が候補地としてあったが、いずれも不適格となり、最終的には当時の寺島商工会長や柏市民新聞関浦社長らの協力を得て、約二万五千坪の現在の戸張の土地を学校用地として買収することになった。この用地の買収にあたっては、その土地の大部分が、幸いなことに柏市民の浜島千代丸氏と浜島平樹氏の所有地であったため、難行することなくスムーズに事は運んだようである。

その間、二度にわたり井上氏は、米本理事長より校長への就任を要請されていたようであるが、氏は翌年には、ドイツ・ニーランドの視察を目的に渡米する予定であったため、その要請を断り続けていたようである。しかし、昭和三十五年一月末に、同氏は旧知の友である当時の柴田千葉県知事から電話があり、校長就任を懇願されたため、

断わりきれず引き受けることになった。このように同氏は当時の事情を『創立二十周年記念誌』の中で回顧している。

かくして、設置へ向けての準備が整ったことから、日本体育会は、前記の市議会決議をうけて、昭和三十五年一月十一日、「柏日体高等学校設置認可申請書」を千葉県知事宛に提出した。

設置趣意書の要点は、左に掲げることくである（『創立二十周年記念誌』）。

一、設置趣意

(1) 第二次世界大戦後施行の教育制度による自由平等と男女教育の機会均等、そして義務教育終了者の進学の著しい増加。

(2) 東京の衛生都市である柏市の急激な人口増加と柏市の要請。

(3) 本会は地域社会の要望にこたえ、本法人の理想とする教育方針、即ち

イ、心身両生活の健全な向上発展を基礎とし、徳性の涵養、特に職業教育に留意し、

ロ、実社会でも家庭でも役立つ教養に重点を置き、

ハ、全生活を通して自主自発的に陶冶成長する有為な人材、あるいは家庭の主婦として国家社会の公民を育成するため、高等普通教育ならびに専門技能教育を施す。

二、設置計画

千葉県柏市戸張地区に二万三千五百十九坪の敷地を購入し、別紙事業計画書（省略）の通り三期に分けて設置設備を完成する。この間、昭和三十五年四月より、六月までの三カ月間は隣接地区にある東京都中央区立柏学園の施設を借用し七月において校舎工事が完成次第直ちにこれに移転する。

三、目的

教育基本法および学校教育法の精神に基づき義務教育を終えたものに対し、高等普通教育および専門教育を施し、とくに健康な身体と健全な人格を陶冶し、社会的教養を授けることによって、国家社会に有為な人材を育成することを目的とする。

とまれ、日本体育会は、昭和三十五年三月四日、千葉県知事から高等学校設置の認可を得、同年四月一日、柏日体高等学校の開校に漕ぎつける。このように、二か月足らずの短期間の内に柏日体高等学校が開校できたのは、柏市当局をはじめとする関係諸氏の涙ぐましい努力の賜であり、さらには日本体育会の、とりわけ米本卯吉理事長の教育者としての熱意と理解があったからであらう。

(二) 仮校舎からの出発と井上初代校長の「蟻」教育

柏日体高校は、昭和三十五年四月一日開校したが、同年七月に本校舎の第一期工事が竣工するまでは、隣接する東京都中央区立柏学園の施設を借用し、第一期生の入学式もこの施設で挙行された。当施設は、緑の林に囲まれ環境には恵まれていたが、かなり老朽化が進んでおり、田舎の木造の校舎という感じのものであった。ある日、米本理事長が来校された折、講堂等の施設がないため全員が廊下に集合すると、その重みで床がパタンと抜け落ち、理事長の講演が中断したこともあった。また、教室やトイレの床を破って竹の子が伸びてきたり、窓ガラスには昆虫等が這い回る光景もめずらしくはなかった。校舎の前にはわずかな広場もあったようであるが、運動用器械として

開校当時の学年別定員

学年別 科 別	第 1 学 年		第 2 学 年		第 3 学 年	
	級	定 員	級	定 員	級	定 員
普 通 科	3	120	3	120	9	360
商 業 科	2	80	2	80	6	240
合 計	5	200	5	200	15	600

は、鉄棒が一つ設置されていたにすぎなかった。このように開校当初は、教育環境としては全く恵まれない状況にあったが、ここを根城として柏日体高等学校は、未来へ向けての第一歩を確実に踏み出したのである。仮校舎からの出発であった。

当時、本校は普通科と商業科の二科からなっていたが、それぞれの学年別定員は上に掲げる通りであった。

なお、普通科と商業科のいずれも男女別学とされ、普通科の定員百二十名、三学級の内、一学級が女子、商業科の定員八十名、二学級の内、一学級が女子で編成されている。

いっぽう、開校当時の教育課程及び授業時数については他の学校に比して特に変わることはないが、本校初のカリキュラムなので次に掲げておくことにしたい。

当初の教職員は総勢四十四名をもって構成され、その内訳は一、校長一名 二、教諭二十六名 三、講師四名 四、実習助手六名 五、事務職員四名 六、校医二名 七、養護教諭一名であった。

昭和三十五年七月に第一期工事が竣工し、仮校舎から新校舎へと移転したが、広大な校地は林を切り拓いたままの状態で、切り株などが転がり、外柵もない有様であった。そのため、教職員及び生徒は夏休みも返上して校内整備にあたり、切り株の掘り起こし、樹木の移植、ローラー引き、土手堀の構築、通学路の普請、広大な

開 校 当 時 の 教 育 課 程
普 通 科

教 科	科 目	単 位 数				総時数	摘 要
		学 年 別			計		
		1	2	3			
国 語	国語 甲	③	3	4	10	350	1. △は選択科目を示す 2. 週授業時数は31時間とする 3. このほか教育活動は週当り2単位時間を当てる
	国語 乙	△②男	△ 2	△ 2	△ 6	△ 210	
社 会	社 会	⑤	5	5	15	525	
	日 本 史	5	5	5			
	人文地理	5	5	5			
数 学	数学 I	⑥	3		17	595	
	数学 II		3				
	数学 III			5			
理 科	生 物	⑤	5	5	15	525	
	物 理	5	5	5			
	化 学	5	5	5			
保健 体育	体 育	③	2	2	9	315	
	保 健		1	1			
家 庭	家庭一般	△②女	△ 2		△ 4	210	
	食 物			△ 2			
職 業	商 業	②	2	2	6	210	
芸 術	音 楽	△ 2	△ 2	△ 2	△ 6	△ 210	
	書 道	△ 2	△ 2	△ 2	△ 6	△ 210	
外国語	英 語	⑤	5	5	15	525	
計	必 修	29	29	29	87	3,045	
	選 択	△ 2	△ 2	△ 2	△ 6	△ 210	
	合 計	31	31	31	93	3,255	

商 業 科

教 科	科 目	単 位 数				総時数	摘 要
		学 年 別			計		
		1	2	3			
国 語	国語 甲	③	3	3	9	315	1. △は選択科目を示す 2. 選択科目は1・2年は国語乙・商業美術・家庭一般中より1科目4単位を、3年は商業法規・商業簿記・商品・和英タイプ・食物の中より3科目6単位を選択せしむる。 3. 週授業時数は1年30時間、2年31時間、3年32時間とする。 4. このほか特別教育活動に過当たり2単位時間を当てる。
	国語 乙	△ 2	△ 2		△ 4	△ 140	
社 会	社 会	③	3	3	9	315	
	日 本 史	3	3	3			
	人文地理	3	3	3			
数 学	数学 I	③	3		6	210	
理 科	生 物	③	3	3	9	210	
	化 学	3	3	3			
保 健 育	体 育	3	2	2	9	315	
	保 健		1	1			
職 業	商業一般	②	2	2	2	70	
	商事経済	2	2	2	2	70	
	経 営	2	2	2	2	70	
	文書実務	2	2	2	2	70	
	商業法規	2	2	2	2	70	
				△ 2	△ 2	△ 70	
	商業簿記	④	4	4	4	140	
				△ 2	△ 2	△ 70	
	工業簿記	4	4	4	4	140	
	銀行簿記	2	2	2	2	70	
	会 計	3	3	3	3	105	
	計算実務	②	2	2	6	210	
	商業英語			5	5	175	
	商業美術	△②男	△ 2		△ 4	△ 140	
	商 品			△ 2	△ 2	△ 70	
和文タイプ			△ 2	△ 2	△ 70		
家 庭	家庭一般	△②女	△ 2		△ 4	△ 140	
	食 物			△ 2	△ 2	△ 70	
外国語	英 語	⑤	5		10	350	
計	必 修	28	29	26	83	2,905	
	選 択	△ 2	△ 2	△ 6	△ 10	△ 350	
	合 計	30	31	32	93	3,255	

校地の草取り、芝植え等の作業が炎天下の中で毎日続けられたのである。芝は、生徒が片道二時間半以上もかけて自転車で習志野の自衛隊までもらいに行き、それを持ち返って校内に植えたという。井上校長も垂範率先して校内の整備にあたり、時には鋤を持ちたりヤカーを引く姿も見られた。このように開校当初は大変な苦勞があつたのであるが、逆に教職員生徒全員が一九二〇年として新しい学校を作ろうとする意欲に燃えた良き時代でもあつた。

旧帝国軍人であつた井上校長はことの外、躰には厳しく次の「躰三則」なるものを掲げ、将来、社会の中堅になつても立派に通用する人間の育成に全力を傾注したのである。

礼儀と作法を重んじ、言葉使いを正しくし、品位と教養を身につけよ。

進んで人の嫌がる仕事、人の目につかない仕事に従い、勞を惜しむな。

素直で、明るく、親しまれ、愛される人間となれ。

井上校長は朝は必ず校門に立ち服装指導・礼法指導を行ない、清掃はもちろんのこと下駄箱の靴の入れ方までこ細く注意したという。帰りは生徒全員を校長室まで挨拶に来させ、特に女子生徒には東京の有名校のように「ごきげんよう」と挨拶させた。

当時、学内の清掃は隔々まで行き届いた。本校視察に訪れた平山博三、浜松市長は、浜松日体高等学校の入学式の祝辞の中で、開校当初の柏日体高等学校を次のように賛辞した（『創立二十周年記念誌』）。

同校は創立早々であつたが、教職員、生徒が一体となり、礼儀が正しく、校内の整備整頓、清掃の行き届いてゐるのに感服させられた。私は廊下の腰板のへりに指をふれて歩いたが、指先に少しのちりもなかった。窓のさんにはこりなく、便所もきれいになつていた

開校当初の同校の状況を、大變的確に表現した言葉であらう。

制服は、東京のとある有名私立高校の制服に似たモダンなものであつた。この制服の外に、校内服なるものがあり、校内では必ずこの服に着替えなければならなかつた。

また当時、軍隊生活の中から取り入れられたと思われる「指導生徒」というシステムがあり、上級生が、よき先輩として下級生に対し、勉学をはじめ学生生活の全般にわたつてこと細かく指導したようである。

このような学内での徹底した教育指導は、臨海学校や林間学校等の校外教育の場でも貫かれた。鎌倉の由比ヶ浜に米本理事長が経営するホテルがあつたが、そのすぐ裏手に日体大の学生が夏場そこでよく合宿を行う施設があつた。昭和三十六年から四十二年まではこの施設を使って臨海学校が行われた。その折も、生徒は、沢山の雑巾をもつて行き、内・外が全部ピカピカになるまで磨いたり、布団が狭い押入れにきちんと収まるまで全神経を使って何度もその上げ下げを行ったという。林間学校も一年生を対象に昭和三十六年から昭和四十三年まで実施され、第一回は富士山でサマーキャンプが実施された。このキャンプは、かなり厳しい自衛隊なみのキャンプ生活であつた。しかしその反面、当キャンプ地には風呂がなかつたため、全員で歌をうたいながら町まで入りに行かせたこともあつたという。

開校当初の生徒数の推移（第1期～第5期）

		1期	2期	3期	4期	5期
普通科	男	78	77	173	166	189
	女	39	28	113	88	156
商業科	男	34	33	57	57	60
	女	35	24	56	49	58

井上初代校長は、前述のごとく教育界からではなく民間から登用されたわけであるが、同氏のこれまでの豊富な人生経験に基づいて、実際の生活に役立つ躰や規律を学校生活全般や校外授業等を通して生徒に徹底して指導していったのである。その為、他の学校とは異なるユニークな校風が築かれ、世間からは躰の厳しい学校という評価を受ける程になった。

（三） 教育内容の改編と運動クラブの台頭

昭和三十五年、開校は普通科定員一二〇名（三学級）、商業科定員八〇名（二学級）をもつて開校したが、当然のことながら定員を越えて生徒の入学を許可している。上の表は、一期生から五期生までの生徒数を示したものであるが、これによって開校当初の本校の勢いを見定めることができる。

表「開校当初の生徒数の推移」をみると、生徒数は年を追って増加傾向にあり、特に三期生以後はその傾向が顕著に現れていることがわかる。当時柏市周辺には高校が少なかったため、入学希望者が殺到した結果であった。三期生の時には、施設が間に合わず、廊下と教室の境を取りはずして授業を行い、四期生を迎えるときには、現在の図書館の横にプレハブの校舎を建設して対応した。このような入学者の激増は同時に、入学定員の変更を迫るものであった。その結果昭和三十九年、学則を改正し、普通科定員一年三五〇名、二・三年各二五〇名、商業科定員一・二・三年各一一〇名に変更されたのである。このように、商業科も普通科同様定

昭和42年度より適用の教育課程

教科	科目	学 年 類 型	基 準 単 位	第1学年	第2学年		第3学年	
				共 通	A	B	A	B
国 語	現 代 国 語		7	3	3	3	3	3
	古 典 乙 I		5	2	3	3		
	古 典 乙 II		3				3	3
社 会	倫 理 社 会		2		2	2		
	政 治 経 済		2				3	3
	日 本 史		3		4 (3)	4		
	世 界 史		4				4	4
	地 理		4	4				
数 学	数 学 I		5	6 (5)				
	数 学 II		5		5	6 (5)		
	数 学 III		5					5
理 科	物 理		5				5	5
	化 学		4		4	4		
	生 物		4	4				
	地 学		2	2				
外国語	英 語		15	5	5	6	5	5
体 育	体 育		9(7)	3 (2)	3 (2)	3 (2)	3	3
	保 健 衛 生		2		1	1	1	1
其 の 他	家 庭 一 般		(4)	(2)	(2)	(2)		
	書 道 音 楽		2	書 2 (音 2)				
	商業一般・ 商簿・計算 実務			1	2	5		
	L・H・E			2	2	2	2	2
	計			34	34	34	34	34
備 考 () 内は女子とす								

員を増やしたが、両科の生徒数からもわかるように、当時、普通科へ入学希望者が集中する傾向にあったといえう。また、商業科は、和英文タイプ、珠算、簿記、会計など直接就職に役立つ技術教育に重点を置いてきたのであるが、実際商業科の卒業生も普通科の卒業生も同じような職種に着くケースが多くなったため、商業科の存在意義も薄れてきた。

このような状況をうけて、柏日体高等学校では昭和四十年をもって商業科の募集を停止することになり、五期生卒業後はこれを廃止することを決定した。これに伴って学則を変更し、普通科のみ男子定員二〇〇名、女子二〇〇名として再出発することになったのである。これは、現状を冷静に分析した上、将来へ向けて着実な一歩を踏み出そうとする姿勢の現れといえよう。

また、商業科の廃止にともなって、普通科の教育課程も改善された。そこで昭和四十二年四月より適用された普通科の教育課程を掲げておきたい（前頁表参照）。

改正後の総履修単位数をみると、それが九十三から一〇二に増えていることがわかる。また以前の教育課程では選択制がとられていたが、この教育課程から必修制に切り換えられ、男子と女子が履修すべき科目及びその単位数も明示された。

普通科一本に絞り再出発を図った柏日体高等学校であったが、もう一つの新しい転機がおとずれた。昭和四十四年七月をもって開校以来同校の発展に多大の功績を残した井上初代校長が退任、同年八月から二代目の校長として池田皓氏が就任したのである。当時は、各地の学校や教職員の間で学園の民主化を求める運動がたかまっており、柏日体高等学校でもその民主化の気運は熟していた。新校長の就任と併行して、特に生活指導の面で以前より

は柔軟な措置がとられるようになった。たとえば、従来男子生徒に対して短髪であることが定められていたが、昭和四十五年からは正式に長髪が許可されることになり、また同年以後男子夏服の上衣が廃止され、ズボンも紺色のものに変更された。

昭和四十四年八月に就任した池田校長も、昭和四十六年三月をもって退任することになり、同年四月から八木林平氏を校長として迎えることになった。八木校長の最初の仕事は、開校以来続いていた男女別学を男女共学とし、入学定員も三二〇名（八学級）に変更することであった。当初は、男女共学に対し不満を持つ学生も多少はいたようであるが、ホームルーム活動や校外授業等を通し、共学のメリットが理解されるようになっていった。さらに、同年より教員が校長以下四十六名になり、より一層の教育内容の充実が図られていく。

また、この頃は、クラブ活動の面でも新しい展開がみられた時期であった。

開校当初の昭和三十六年にはすでに、放送部、購買部、図書部、飼育部、ブラスバンド部、自動車部、テニス部、バレー部、剣道部、柔道部、バスケット部、野球部、バドミントン部、卓球部、体操部、陸上競技部、園芸部、英語部、珠算部、美術部、写真部、書道部の計二十二のクラブが発足し、その後空手部やサッカー部やラグビー部等のクラブが創部されている。しかしその反対に廃部の止むなきに至ったクラブもあった。ともあれ、運動クラブの活躍を眺めてみると、昭和四十二、三年頃まではほとんど目立った成績を上げていない。「日体」を冠する高校にしては不満の残る成績であった。その不振の理由は井上初代校長があえて競技力向上策をとらず、躰や規律等の訓育面を重視したところにもとめられよう。

しかし、井上校長が退任した昭和四十四、五年を境に、運動クラブは頭角を現しはじめた。関東大会や全国大会

にも出場するクラブが出てきたのである。昭和四十六年には陸上競技部が関東大会に、四十五年には全国大会に選手を送り出したし、空手部は、昭和四十六年には県大会の団体組手で悲願の優勝を達成している。サッカー部や体操競技部も、県内では上位の成績を収めるまでに成長した。五十年代に入ると、これらのクラブの他に、少林寺拳法部とトランポリン部も全国大会で優秀な成績をあげるようになる。昭和五十二年には少林寺拳法部が全日本大会個人演武（初段の部）で優勝を収め、トランポリン部も昭和五十三年には全国大会Aクラスで四位に入賞したのである。

昭和五十三年四月に入學した十九期生の一人が、『創立二十周年記念誌』の中で「我が日体高の特徴という運動系のクラブが盛んなことだと思ふ。朝は早くから、帰りは下校時間いっぱいまで、それぞれが持てる力の限界まで出し、真剣そのものである。授業よりもイキイキしているようだ」と語っていることから推すことができるように、柏日体高等学校はスポーツのエリート養成校への道を歩みはじめたといえる。それは昭和四十四、五年からの傾向であり、本校にとっての大きな転換期であつたといえよう。

（四） 教育課程の改正 ー 選択制の導入 ー

五代日校長に森啓氏が着任してから二年後、つまり昭和五十四年度は、同校にとって創立二十周年にあたる年度で、これを記念して各種行事が開催され、併せて管理棟の増築及び諸施設の改築が行われた。同年六月二十日、米本正理事長臨席のもとで創立二十周年記念式典が挙行され、その際全生徒に記念誌と校名入りのアルバムが配布されたし、さらには、同年十月二十九日に、同校の関係者を集め二十周年記念の会が柏をこいで開催されている。こ

昭和57年度より適用の教育課程

教科	学 年		1 年	2 年				3 年			
	科 目	コ ー ス	必 修	A		B		A		B	
				必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択
国語	国語	I 現代語 II 古典	5	5		5		3 3		3 3	
社会	現代社会 日本史 世界史 2年演習 2年演習 3年演習 3年演習	I II I II I II	4	4 2	(2) (2)	4 2	(2) (2)	2 4		2 4	(2) (2)
数学	数 数 代 基 礎 確 率	I 何 II 幾何 I 解析 II 統計	5	3 3		4		3 (2)		3	
理科	理科 ※物理又は生物 ※化学又は地学 理科演習 理科演習	I II I II	5	4 (2)		4 (2)		4 (2)		4 (2)	
保健	体育	保健	4 2	3		3		3		3	
芸術	音楽 美術 書道	楽 術 道	いずれか 2	(2) (2) (2)		(2) (2) (2)		(2) (2) (2)		(2) (2) (2)	
英語	英 英 講 講 演 演	I 語 II 読 I 読 II 演 I 演 II 習	5	4 (2) (2)		4 (2) (2)		4 (2) (2)		4 (2) (2)	
家庭	家庭	一般		2		2					
商業	簿記	会計				②(2)					
	必修	クラブ	1	1		1		1		1	
	H	R	1	1		1		1		1	
	単位数合計		34	32 + (2) 34		30 + ② + (2) 34		28 × (2) × 3 34		28 + (2) × 3 34	

の二十周年を迎えた翌年には学則も改正され、入学定員は三二〇名から三六〇名（八学級）に増員された。さらに昭和五十七年四月から選択制を導入した教育課程がスタートした。それは前頁に掲げる通りであり、昭和五十七年四月より導入された新教育課程である。

この教育課程では、社会・理科・芸術・英語の各教科に選択科目が開設され、その選択科目の多くは少人数で授業を行う「演習」形式が採用されている。そこには、よりきめ細かく徹底して指導を行おうとする学校側の姿勢が現れているといえよう。

しかしこの間の社会の情勢はめまぐるしく変化し青少年に与える影響も深刻となった。ために、生徒の生活指導の方面でもこれまでにはなかった困難に直面するようにもなった。五十年代の中頃から、本校でも生活指導や学習指導の面で色々な改善策が講じられたのもそれがためであった。昭和五十六年には、全学生に家庭学習ノートを作らせ、点検するシステムが始まり、翌五十七年より二年生を対象に六泊七日の学習合宿も開始された。さらには、五十八年には、生徒の学習意欲をどう持続させるかについて検討した結果、授業日数を、一・二学期は一・二・三年生とも十一週に、三学期は一・二・年生を八週に、三年生を四週とし、計一・二年生は年間を通じ三十週に、三年生は二十六週にすることになった。また同年より、入学前に父母及び生徒を本学体育館に集め、説明会を実施するようになり、その後もこのような説明会は毎年行われている。また、五十九年には、同和教育についての講師を招いて研修会を開催したり、六十年と六十一年には、性教育についての講師を招いてH R研修会を実施する等、各方面にわたって色々な努力が講じられたのである。

さらに、六十二年には、社会のニーズにあった魅力ある教育課程を作成するための検討にも入った。その結果、

昭和63年度より適用の教育課程

	必修		選択 (下記のいずれかを選ぶ)			
1年	国語Ⅰ	5	音楽Ⅰ	3		
	現代社会	4	美術Ⅰ	3		
	数学Ⅰ	5	書道Ⅰ	3		
	理科Ⅰ	6				
	体育	3				
	英語Ⅰ	5				
	必修クラブ	1				
	H R	1				
	合計	30単位	合計	3単位		
	必修	選択Aグループ	選択Bグループ			
2年	国語Ⅱ	5	宗教と思想	3	地域と現代	2
	日本史	4	地域史と現代	3	基礎解析演習	2
	数学Ⅱ	4	代数・幾何	3	数学演習Ⅰ	2
	化学	4	生物	3	生物実習	2
	体育	4	地学	3	理科実験	2
	英語Ⅱ	3	物理	3	図芸	2
	家庭一般	2	総合英語AⅠ	3	総合英語B	2
	必修クラブ	1	サイドリーダーAⅠ	3	実用英語講座	2
	H R	1	英作文法演習AⅠ	3	簿記会計Ⅰ	2
			英会話Ⅰ	3	音楽Ⅱ	2
			中国語Ⅰ	3	美術Ⅱ	2
			音楽Ⅱ	3	書道Ⅱ	2
			美術Ⅱ	3		
	合計	28単位	合計	5単位		
		必修	選択 (下記のいずれかを選ぶ)			
3年	現代文	3	総合応用国語	3	生物演習	3
	古典	3	文学作品研究	3	総合英語AⅡ	3
	世界史	4	国際化時代の地理	3	サイドリーダーAⅡ	3
	地理	3	憲法と現代の日本	3	英作文法演習AⅡ	3
	体育(男)	4	講座日本史	3	英会話Ⅰ	3
	体育(女)	2	数学演習Ⅱ	3	英会話Ⅱ	3
	保健	2	実用数学	3	中国語Ⅱ	3
	英語Ⅱ	3	わかる数学	3	簿記会計Ⅰ	3
	家庭一般(女)	2	微分積分学	3	簿記会計Ⅱ	3
	必修クラブ	1	確率統計	3	食物	3
	H R	1	天文と気象	3	音楽史	3
			物理演習	3	書道Ⅲ	3
			化学演習	3		
	合計	24単位	合計	9単位		

昭和六十三年四月より前頁の表のような教育課程が採用され、以前よりは必修科目が少なくなる一方、選択科目数が増えるという選択必修制が導入された。

このように、必修科目の外に、多くの選択科目が開講されることになった。その中には、国際化社会を前提にした外国語関連科目が多く採用され、平成元年度からは英会話の教師としてブラッグ氏を、また中国語の教師として彭先生を迎えるにいたっている。

(五) 施設の拡充と進学状況の推移

関係諸氏の暖かい援助を得て、現在の戸張地区に二三、五一九坪（七七、七四八平方メートル）の用地を購入したのは、昭和三十四年二月のことである。翌三十五年二月には早々と本館第一期工事に着工し、同年七月には竣工している。竣工と同時に柏学園の仮校舎からの移転が行われ、また同年十二月には体育館工事にとりかかり、翌年三月に完工した。昭和三十七年三月、本館第二期工事として本館西側の増築工事が竣工し、昭和三十九年には第三期工事として別館工事が完工した。さらには昭和四十三年三月に第四期工事として本館東側の増築工事が竣工しこれをもって本館の全てが完成した。四十四年八月には、体育館とは別に、武道館の建設工事が竣工し、四十六年三月には女子更衣室及び倉庫用棟が建設された。昭和五十三年には会議室棟が増築され、創立二十周年にあたる昭和五十四年八月には生徒用玄関の増築工事が行われた。同年十月には管理棟増築工事が竣工し、それと同時に管理棟が本館から切り離されることになった。また同年十二月には、別館普通教室が調理室、生物室、補習室等に改築された。このように昭和五十四年度は、創立二十周年記念行事の一環として、特に施設の整備・拡充に力が注がれた。

のである。

また、昭和五十六年には、父兄会の寄附で外周フェンスが、さらには後援会の寄附で野球場防球ネットが建設され、翌五十七年八月にはサッカーグラウンドが二、〇〇〇平方メートル拡張された。また同年十月には軟式テニス用クレイコートも二面増築された。五十八年には、生徒集会所兼食堂が完成し、六十年九月には家庭科被服室が増築され、六十一年三月にはクラブ活動用男子部室棟が建設された。

以上のように柏日体高等学校では年を追って施設が整備・拡充された結果、現在では大変恵まれた教育環境が出来上がり、生徒たちの大いなる学園生活の支えとなっている。

次いで柏日体高等学校の進学状況についてみてみよう。本校は開校以来約九、五〇〇名の卒業生を世に送り出しているが、そのうちの十七パーセント強の、つまり、一、七〇〇名弱の卒業生が、大学や短大へ進学している。姉妹校である日本体育大学への進学者が最も多いが、その外の文科系や理科系等の大学に進学している者も、決して少なくない。

次頁の表は、第一期生から第二十八期生までの進学状況の推移を示したものである。この表から次のような傾向が読み取れよう。

すなわち高学歴社会を背景に、近年、大学進学率が伸びる中、柏日体では大学進学率が横這い状態にある。その上、現在よりも、草創期から十五期生頃までの方が大学及び短大への進学者が多くまた進学率も高い傾向にある。特に、三期から六期までの男子生徒の一般四年制大学への進学者が多いのが目立つ。日体大への進学者に限ってみると、逆に十五期生以後の方が、日体大及び日体大女子短大への進学者が増えている。このような傾向は、本校が

期	卒業時生徒数			進 学 状 況 の 推 移				進 学 率			備 考		
	男	子	女	日 本 大 学	日 本 短 大	一 般 大 学		一 般 短 大		進 学 者 数			
						男	女	男	女				
1	112	74	186	5	0	9	1	0	0	15	12.5%	1.4%	8.1%
2	110	52	162	10	1	4	4	2	1	22	14.5%	11.5%	13.6%
3	230	169	399	4	0	57	3	2	0	66	27.4%	1.8%	16.5%
4	223	137	360	1	0	65	2	0	4	74	29.6%	5.8%	20.6%
5	249	214	463	8	0	72	1	0	10	91	32.1%	5.1%	19.7%
6	210	169	379	0	1	51	5	1	15	75	24.8%	13.6%	19.8%
7	197	170	367	5	0	41	6	0	11	63	23.4%	10.0%	17.2%
8	214	221	435	2	0	35	6	1	18	63	17.8%	11.3%	14.5%
9	245	206	451	4	0	49	4	1	18	76	22.0%	10.7%	16.9%
10	168	154	322	3	0	38	6	2	20	69	25.6%	16.9%	21.4%
11	162	190	352	4	0	26	7	4	29	71	21.0%	19.5%	20.2%
12	185	195	380	4	0	38	7	3	27	82	24.3%	19.0%	21.6%
13	167	159	326	5	0	36	3	1	31	76	25.1%	21.4%	23.3%
14	193	115	308	8	1	32	8	2	14	65	21.8%	20.0%	21.1%
15	187	118	305	14	1	28	1	2	25	74	23.5%	25.4%	24.3%
16	199	95	294	11	0	20	1	4	14	55	17.6%	21.1%	18.7%
17	245	109	354	14	0	33	1	3	14	70	20.4%	18.3%	19.8%
18	246	83	329	6	2	29	0	7	13	58	17.1%	19.3%	17.6%
19	233	111	344	10	0	39	0	1	11	61	21.5%	9.9%	17.7%
20	232	87	319	5	1	28	0	1	6	42	14.7%	9.2%	13.2%
21	214	118	332	10	2	20	0	2	20	54	15.0%	18.6%	16.3%
22	238	93	331	10	1	26	3	0	6	49	15.1%	14.0%	14.8%
23	232	103	335	11	1	14	0	0	5	33	10.8%	7.8%	9.9%
24	214	86	300	12	2	24	0	5	10	56	19.2%	17.4%	18.7%
25	286	90	376	15	2	18	3	1	9	51	11.9%	18.9%	13.6%
26	260	124	384	15	2	29	3	0	10	63	16.9%	15.3%	16.4%
27	233	133	366	19	5	19	4	2	19	74	17.2%	25.6%	20.2%
28	215	119	334	12	5	13	3	1	13	50	12.1%	20.2%	15.0%
合計	5,899	3,694	9,593	227	27	48	82	48	373	1,698	19.8%	14.6%	17.5%
											平	均	

昭和四十年代の中頃から運動クラブの育成に力を注ぐようになったことも関連しているように思える。いっぽう、女子の保育、看護などは、数十年来変わることなく女子の堅実な職業教育の場として希望者が絶えたことがなく、また近年の新しい傾向として、専門学校への進学希望者が男女を問わず増えていることも事実である。

(六) 新たな発展を求めて

柏日体高等学校は、関係諸氏の涙ぐましい努力と、日本体育会の、とりわけ米本卯吉理事長の支援によって昭和三十五年四月、開校した。草創の頃は、旧帝国軍人であった井上初代校長の「躰」教育が生徒たちに浸透し、その結果、特に訓育面を重視するユニークな校風が築かれていった。

昭和四十年を境にして、改革への動きがみられるようになり、たとえば商業科の廃止や男女共学の導入、それに伴う教育課程の改正等幾つかの改革が進められた。その反面、草創の頃と比べると他の学校と似たようなカラーにおさまり、特色が薄らいできたともいえよう。新たなカラーの創造が、今こそ求められている。そのひとつはカリキュラムの中で構想されている国際化社会・情報化社会への対応策のうちに見出せよう。

浜松日体高等学校



校歌

一戸弘哉 作詩
鷹司平通 作曲

一、久遠に光る富士が嶺は
われらがかざす旗幟なり
立てし心の撓みなく
理想の峰にのぼらばや
学びの庭は積志台

くまは んびら にのう かどん るにの ふつは じむな がゆの—あ—
はさ わ— れがき らが— か— さ— すの— しつ
あ— りりい (うらうら) なり— し— こま— うの—
しき— な— (うらうら) ち— は— め— か— わ— て
poco a poco cresc
たしけ ゐうみ ののば りそうの— おりく のぼ— らばや— まなつ
しけ ゐうみ ののば ゐたけきか— ゐの— ひかり— もなく
ようよう えさき ゐの— もなく
1. 2.
の— わ— は— せ— さ— し— だ—
の— ゐ— と— か— ゐ— ま—
3.
い— (2)は— (3)は— し— そ— わ— ん

二、学びの窓に積む雪は

やがてわれらの知識なり

塵にはそまぬ 白梅の

ゆたけき香り 身の光

松のみどりと 変はるまじ

三、春繚乱の花の朝

秋蕭条の月の宵

諫めかはして励みなば

洋々さへぎる 雲もなく

行く手に光りさし添わん